

Title	貨幣数量説の史的考察
Sub Title	
Author	萩原, 吉太郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.1 (1924. 1) ,p.119- 147
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240110-0119

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

すものである。即ち吾人の外界の有ゆる觀念を
思索の主觀的感情に持ち行くのである。(Court-
ney: J. S. Mill, p. 137) 吾人は彼の思想の中に
ロックス、ヒーム等によつて代表さるゝ經驗派と
カント等によつて導かるゝ理想主義との結合の
最も教示的なる説明を觀る。

論者或は云ふ功利主義程概念的混雜に支配さ
れた學説は嘗て存在しなかつた。(阿部次郎氏
倫理學の根本問題九三頁)。吾人はミルの諸書
を讀みて屢々此の感に襲る。併し彼がよく感覺
的快樂を以て満足せず、人間の内心に介在する
ものを求めしことを認めねばならぬ。彼は功利
主義の理想は一般人士が高尙なる性格を養成す
ることに依つてのみその目的を達成し得ると云
ふ。(Mill: Utilitarianism, p. 16) 彼の尊ぶ所は精
神の修養であつた。

トーマス・ヒル・グリーンは英國經驗派の努力

人も之れを認めざるを得ざる所であらう。

貨幣數量説の史的考察

萩原吉太郎

凡そ經濟學上諸説相頡頏して紛々たる論議を
惹起したること貨幣價值の問題より甚しきは無
い。就中、貨幣數量説は恒に其論議の焦點に位
し、其現在具有する内容形態に到達する迄には
峻烈なる難詰と幾多試練の間を經過したのであ
る。従つて今斯説發達の迹を遡つて這個の消息
を探求するも強ち徒事でもあるまい。私は以下
主なる學者の著書を必要なる限度に於て引用檢
討して其一斑の窺知に務め度いと思ふ。

I John Locke

John Lockeを以つて貨幣數量説の鼻祖となす
は今や學者間の通説である。乍併斯説は決して

を稱して、智識の世界より精神の作用を消滅し、
智識の對象を貪しき受動的感覺に短縮せしこと
にあるとす。(Rogers: English and American
Philosophy since 1800, p. 221)。然れども吾人
はグリーンンの善或は神とは自己の可能性の實現
なりとする思想(Ibid. p. 224)と這個のミルの學
説との間に相共通なるものを見出すのである。

八

一八七三年五月八日佛國アヴィニョンAvignon
にジョン・スチュアート・ミルを失ひ今方に五十
年の星霜を經過した。
憶ふに倫理説としての功利主義は既に十九世
紀の後半二三十年間に大體その基礎を失つた。
(Albee: A History of Utilitarianism, Intro. xii)。
然れども過去半世紀に互りミルの最大幸福説が
實際上の功利説運動の根元となり、法律或は政
策の問題に顯著なる功績を與へたるの事實は何

彼に依つて創見せられたるものに非ずして、唯
單に彼を俟つて初めて比較的鮮明に表現せられ
たに過ぎ無い。従つて彼に附與するに鼻祖なる
冠辭を以つてするは必しも允當ではない。斯説
の萌芽は既にJean BodinのRéponse aux Para-
doxes de M. de Malestroit touchant l'encherisse-
ment de tous-les choses et des monais. 1568. の裡
に發見せられ、次いで其意見はW. S. の A Com-
pendious or brief examination of Certayne
ordinary Complaints of diverse of our Country-
men in these our days: which although they are
in some part unjust and frivolous throughly de-
bated and discussed, by W. S., Gentleman 1581.
に依り踏襲せられ、更に降つてRice VaughanのA
Discourse of Coin and Coinage: the ferst Inven-
tion, Use, Matter, Forms, Proportions and Dif-
ferences, ancient & Modern, with the Advantages of

the Rise or Fall thereof, in our own or neighbouring Nations; and the Reason, Together with a Short Account of Our Common Law therein. As also Tables of the Value of All sorts of Pearls, Diamonds, Gold, Silver, and other Metals. 1673. の裡にも逢着する。W. S. は學術を代表せる神學博士をして目前の經濟事象を説明せしめてゐる。即ち「博士は物價騰貴の原因を前數治世の間に於ける鑄貨の品位下落に求め、——次いで英國内の貨幣は今や其適度の品位を回復したりと雖も、印度より殆ど無限に貴金屬の輸入せらるゝ結果として貨幣價值は依然其下落の趨勢を繼續し、舊時に在りては、三十磅乃至四十磅の取入を有する者は富者中に算へられたるも今日にては乞食と相去る遠からざるものと看做さるゝに至れりと説けり」。(高橋誠一郎教授「沙翁の著書と誤傳せられたる匿名氏の經濟著書」經

濟學史研究一五六頁) 又貨幣價值測定の創始者たる Rice Vaughn は千六百五十年の物價が千三百五十年に比し六倍乃至八倍に上り、更に貨幣價值が以前同一名稱により存したるより三倍に引上げられしを考慮に加ふれば二倍乃至三倍の昂騰をなせるを説く、斯くて「吾人は次に金銀と此等に據り評價せられし諸貨物との間に事實生起せる比率の相違は主に否寧ろ全然過去四年間に互り東西印度より輸致せられたる許多の上記金屬數量より惹起せしを説明しよう」と叙述してゐる(ch. XI. p. 124)。以上一二の引用は明瞭に貨幣數量説の萌芽が John Locke 以前に存したる事を裏書するものと確説する事が出来る。勿論彼等の論及する所は、John Locke と異り、貨幣素材たる貴金屬に就いてある。乍併此一事を以つて John Locke を以つて斯説の開祖となし、彼等に於て其萌芽を認むるを否定す

るは餘りに薄弱なる論據と云はざるを得ぬ。現に我々は John Locke 以後の貨幣數量説唱道者を以つて目せらる學者中より鑄貨と貴金屬との間に區別を設けず、又は貴金屬に就てのみ論述する論者を引用するは甚だ易々たる事である。例へば Montesquieu は其名著 *L'Esprit des lois*, 1748. の裡に「貨幣は貨物の價格である。然らば如何にして此價格は決定せらるゝか、換言すれば貨幣の幾許量に依り各貨物は代表せらるゝか。若し全世界に於ける金銀と貨物總量とを比較すれば、汎ゆる特殊の貨物は金銀全量の或部分と比較され得る事明確である。一方の全部は他方の全部なる如く、一方の部分は他方の部分である。現世界に存する貨物單に一個なるか、若しくは購入し得る貨物唯一個のみにして、而も貨幣の如く分割し得ると假定すれば、此貨物の一部分は金銀量の一部と相對し、一方の半ばは

他方の半ばに、一方の十分の一、百分の一、千分の一は他方の十分の一、百分の一、千分の一と對立する。然れ共人類間の貨物は總て一時に取引さるゝものにあらず、又其表徵たる金屬即ち貨幣も總て一時に取引さるゝもので無い。故に價格は貨幣全體と貨物全體との複合割合、及び取引さるゝ貨幣全體と取引さるゝ貨物全體との複合割合に由り決定される。而して今日取引外の貨物及び貨幣も翌日は取引場裡に入り來る事ある可きを以つて、價格決定は根本的には恒に貨物全體の貨幣全體に對する比率に依頼す。」(edit. de Paris. Tome 2. chap. VII. pp. 214. 215) 「印

貴し、二對一の比率にて下落したれば、結局割合は單に十對一に落着くであろう」(chap. XIII p. 217)。と貨幣と貴金屬とを同一視して論述してゐる。又 Mathew Decker の如きは或時は「西班牙、葡萄牙の探險以來歐洲に輸致せられたる金銀分量は此等金屬を従前より一般化し、低落せしめ、爲に二十志は辛うじて西印度發見前一致なりし貨物を購入するのみとなつた」と言ひ、又他時は「我外國貿易衰退し國內現存貨幣の半ばを拉去せらるゝに至れば、土地所産は其現在賣却の自然價格の半ばにて賣却されねばなるまゝ」(An Essay on the Causes of the Decline of the Foreign Trade, Consequently of the Value of the Lands of Britain, and On the means to Restore both pp. 71-72)。(Laughlin, The Principles of Money pp. 231-232 より再引用)。と述べ兩者を全然混淆してゐる。如斯貨幣と貴金屬とを

甄別せざるは當時一般論者の上に認知せらるゝ傾向であつて、而も此事たる未だ紙幣の存在なく或は存在するも未だ注目を惹くに至らざりし當時に於ては何等愕しむに足らない。

斯くの如くなれば、吾人は貨幣數量説は第十六世紀の頃、當時の物價激騰てふ經濟事象とマーカーチリズムとを經濟思想とが偶、逢着したる結果必然的に胚胎したるものにして、それを初めて明晰に表明せるは John Locke であると訂正せねばならない。

洵に未開の寶庫新大陸發見せらるゝや、空しく地下に埋没せられたる金銀は茲に歐洲に流入するに至り、斯くて増大せる貴金屬は貨幣の増加を促し、増加せる貨幣は物價昂騰の因となつた。Jacob の計算に従へば、新大陸發見當時三千四百萬磅なりし歐洲の通貨は千五百九十九年には一億三千萬磅、千六百九十九年には二億

九千七百萬磅に上つた。(Walker, Money, p. 134) 此増加數量は今日より觀察すれば僅少なりと雖既存蓄積量甚だ尠なりし當時に在りては物價の上に著大なる影響を及したのである。例へば佛國に於て千五百一一年より千五百二十年迄五法なりし小麥は千五百六十一年より千五百八十年間には二一・三三法となり。英國に於て千五百六十年より千六百年間の小麥は千四百五十年より千五百年間の二・六四倍に昇騰したのである。(Roscher, Political Economy, Lalor tr. p. 413)

此必然の結果として時人の視線は期せずして貨幣價值の問題に集中せらるゝに至つた。然るに當時はマーカーチリズムの思潮歐洲の天地を風靡し彼等は貨幣と資本とを同義に解し、正貨流入の奨励、流出の阻礙に汲々たる有様なりしを以て彼等は貨幣數量の増減のみが物價激騰の因なりと信憑せざるを得なかつたのである。乍併

這般の見地は物價昇騰するや直ちに發生せるものでは無い。此事は、其當初に於ける各國政府の施政よりして明瞭に察見せられる。例へば西班牙にては重要貨物の輸出禁止、小賣業に對する干渉により、英國の Henry 八世は奢侈品に對する法規、公定價格の設定、外國貿易商の排斥により、這個の現象を阻止せんと務めたのである。(Ibid. p. 413)。

然るば John Locke は如何なる形式の下に如何なる文字を使用して彼の意見々表明せりや。彼は實に經濟學の全野に互ると云ふも敢て不可なき其匿名の著 Some consideration of the Consequences of the Lowering Interest, and Raising the Value of Money. In a letter to a member of Parliaments 1691. に於て必要に應じ斷片的に論及せるものにして、今其散在せる意見を綜合統一すれば次の如くなる。

「汎ゆる貨物の價格は買手及び賣手の數に比例して上下する」(p. 10) 故に「總て物の價值を正當に算出せむと希ふ者は、其捌口に比例せる其數量を量定せねばならぬ」(p. 8)。然るに「貨幣に對する欲望は、恒に殆ど到處同一にして其捌口には極めて微少の變動あるに過ぎず尙且他に容易に其缺を補促するものなければ——其數量を減少せば恒に此價格を増大し此同一分量をして他物の更に大なる分量と交換せしめる」(p. 8)。貨幣の捌口は恒に充分なるか或は充分以上である。故に他貨物の如く其數量と捌口との比率を考慮する事なく單に其數量のみに由り、克く其價值を調整する事が出来る。(p. 70)。

彼の貨幣數量説檢討に際し當然論及せられねばならぬ一事は流通速度なる概念に就いてである。彼は明白に流通速度を寓目せるに係らず、遂に斯項目を貨幣數量説上に論及しなかつたの

係を明示せず、且貨幣を流通場裡に限定する事なく、又信用流通速度等を寓目するに至らず、寔に文字通りの最素樸なる貨幣數量説に過ぎなかつた。然らば斯説が此最素樸の域を脱して、比較的近代的形態への一步を進むるに至れるは何人の炯眼に憑依するか 他無し。David Hume 其人である。

II David Hume

David Hume の論纂を味讀せる者は何人も彼の貨幣數量説に寄與したる三個の效績を認諾せねばなるまい。其三個の功績とは一、前人の漠然と貨幣と貨物とを對立せしむるに反して之れを流通場裡並びに市場に限定したること、二、紙幣及び證券信用を斯説上に論及したること、三、輸出入移動に斯説を適用せること是れである。

右の中第二點は彼を俟つ迄もなく、經濟事象推移の必然の結果として論及せらるゝ所、之を

である。彼は商業にとりて必要なる貨幣數量を論じたる時に次の如く叙述してゐる。

「商業に對する貨幣所要量は幾許なりやを決定するは困難である。所要量は唯單に貨幣數量のみならず其流通速度に關係ある故である。

同一の志も恒に同一ならず或時は二十日間二十人に對し支拂れ或時は百日間同一人の掌中に全然靜止する事もあらう」(p. 33)。斯く明確に意識せる彼にして、何故に之を貨幣數量説上に論及する事なかりしか。此答は甚だ明白にして簡單である。彼の商業にとりての必要とは絶體需要を意味するのである。然るに彼は現實需要は無限なりとする。故に現實需要を論ずる貨幣數量説上に於ては全然彼の頭腦裡に存しなかつたのであつて、彼の見解を以つてすれば當然の歸結と云はねばならぬ。

斯く彼の貨幣數量説は貨幣貨物二量の對立關

以つて彼の功績となすは溢美の言と謂はゞ云へる。遮莫、此三點は貨幣數量説に近代的形態を附與せる事は殆ど吾人の呶々を要せざる所である。私は以下順次彼の見解を引用し、以て其激言たらざるの證左とする、論點の第一は次の一文より明瞭に確説せられねばならぬ。「汎ゆる貨物の價格は貨幣と貨物との比率に依頼し、一方に於ける顯著なる變動は價格を引上げるか引下ぐるか孰れかの一影響を有する事自明の理なりと思考せらる。貨物を増加せば其は低廉となり、貨幣を増加せば其價值は騰貴する。同様に他方前者の減少並びに後者の減少は夫々反對の傾向を呈する。而も物價は一國內に存する貨幣及び貨物の絶對量より市場に現れ、若しくは現る可き貨物及び流通せる貨幣の絶對量に繫依するは明白である。若し鑄貨が函中に閉塞せらるれば、其は物價に關し滅却せられたると同一である。

若し貨物が倉庫中に藏匿せらるれば相等しき結果を惹起するであろう。此場合の貨幣並に貨物は逢着する事なきを以て、相互に影響する事は出来なす」。(Essays, Moral, Political, and Literary, World Library of Word Look & Tyler, pp. 172-173)。論點の第二は次の諸文により證明せられる。「彼等(銀行公債及び證券信用の如き制度)は紙幣を貨幣と同等にし且全國に流通せしめ、之を以つて金銀の地位を補充せしめ、之に準じて勞働及び貨物の價格を引上げ、斯くて是等金屬の大部分を驅逐するか、若しくは、夫以上の増加を抑制するものである」(Ibid. p. 189)「公債證書は吾人にとり一種の貨幣となりて金銀と等しく時價を以つて容易に流通する。」(Ibid. p. 208)「公債證書は一種の證券信用にして此種貨幣に隨伴する汎ゆる不利を具有してゐる。彼等は國家の最も顯著なる取引に金銀を省

除し、之を一般流通場裡に入らしめ、斯くて有ゆる食料品及び勞働を然らざる他の場合に於けるより高直ならしめる」(Ibid. p. 210)。公債證書を以つて貨幣となすは正當なりや否やは勿論議論の余地あるも其は又別箇の問題に屬し爰に論及す可き限りでない。最後に彼は斯説を次の如く國際貿易に適用してゐる。「大英國に於ける全貨幣の五分の四が一夜の裡に滅失し、國民悉く正貨に關して Harris 若しくは Edwards の治世と同一状態に逆轉せば、如何な結果を招來す可きや。汎ゆる勞働及び貨物の價格は之れに準じて低下し、汎ゆるものは當時の如く低廉に販賣されねばならなくなる。如何なる國民も汎ゆる外國市場に於て吾人と角逐し吾人に充分なる利益を齎す價格と同一にて海運を營み製品を賣却する事は出来ない。従つて速に喪失せる貨幣を返還し隣國と同一平準に上らしめる。一度爰

遂に貨幣の需要側を顧眄するに至らなかつたのである。

に到達せば貨物及び勞働の低廉なる事の利益は失はれ此以上の貨幣流入は吾人の充滿に依り停止されるであらう」(Ibid. pp. 185-186)。斯くて彼は Ricardo に先ちて既に諸國民間に於ける貴金屬分配の法則を創見したのである。以爲らく「此作用は——隣接せる汎ゆる國民の間に殆んど各國民の技術及び工業に比例したる貨幣を保有せしむることは明瞭である」。(Ibid. p. 186)。

斯く Hume に據り、修正せられたる貨幣數量説は時人の紹述する所となれるも、而も更に一步を進むる者なく唯其糟粕を嘗むるに過ぎず例へば Joseph Harris の An Essay upon Money and Coins, 1757 の如きは前人の見解を細心に敷衍せるに過ぎない。従つて S. J. Stuart 並びに Adam Smith の反對論に邀へらるゝ迄の貨幣數量説はマーカントリズムの影響を免れずして

然るに Stuart は物價が流通場裡に於ける貨幣總量に依頼すてふ斯説を極力排斥し、其は貨物の數量、人々が其に對して爲す需要、需要者間の競争、需要者の能力の程度に憑依すとなし貨物を欲望との相對的關係に歸せしめんとするに至り、又 Smith は貨物に關する見解は又貨幣にも當儀め得可しとなし、金銀の價値變動は金銀の或分量が購ひ得る勞働量、若しくは其が交換せらるゝ他貨物の量は恒に斯かる交換のなさるゝ時に知られたる鑛山の豐饒度に憑依し、米國の豊富なる鑛山發見の結果金銀の價格下落せるは生産に要する勞働量を減じ得るに至れるが故なりと論斷し、更に進んで例令ひ紙幣の發行を見るも、其れにより代置せられたる部分の貨幣量は流通外若しくは外國に流出す可きを以て、依

然金銀の價值と他種貨物の價值との割合は恒に流通する紙幣の性質又は分量に繫依せず、金銀を供給する鑛山の豊饒度に憑依すと講述したのである。斯くの如き見解は明に貨幣數量説に對つて放たれし攻撃である。(Smithの市場價格に就いて需要供給の關係を肯定すること、及び彼に及せる影響の經路を併せ考ふる時、彼は貨幣數量を遵奉せるに非るやと思惟せらるゝも、事實其の著 *Wealth of Nation* 並び *Lectures on Justice, Police, Revenue and Arms*, Ed. by H. Cannan の孰れに於ても斯説を認諾せる迹を秋毫も認むる事が出来ぬ。故に吾人は曩日アダム・スミス記念講演會に際し、山崎博士が我田引水の見解を抱けりと痛罵せる Laughlin の見解に左袒せざるを得ない。惟ふに此傾向は、前人 Locke, Law, Montesquieu, Hume 等と異り金屬主義を抱懐するに至り、以つて貨幣の商品性を

高調するに至れる必然の結果である。従つてかゝる反對説に濫過せられたる貨幣數量説は其陶化を免れなかつたのである。今其浸潤の迹を尋ぬるに、彼等は需要側をも寓目するに至り、其結果需要にして變化なき限りに於てのみ貨幣價值は貨幣數量に依頼すとなし、又彼等は貨幣價值をも生産費に覓る結果貨幣價值に二個の場合を設定するに至つたのである。這個の消息は近代貨幣數量説興廢の分岐點に立ち、而も克く斯説を改修する事に依り、前人と後人とを連絡するリンクとなれる David Ricardo に於て窺知する事が出来る。

III David Ricardo

Ricardo は Smith の見解を紹述し以て貨幣價值を其生産費に、覓むると同時に何等の制限を附する事なく貨幣數量説を容認した。此結果彼は二個の矛盾撞着する見解を抱持せるが如くに

解せらる。然れ共、之れ彼が遂に明言すべくして明言する事なかりし不注意に基因するものにして、彼の胸奥に於ては此二個の見解は何等の撞着なく併有せられたのである。即ち彼は一國の貨幣が其に由り置換せらるゝ商品量と正しき割合を保有せる場合には勞働價説を適用し、其他の場合には貨幣數量説を採用したのである。然して彼の特に紙幣に關して斯説を論述する事多きは、當時彼の目前に横る焦眉の急は金紙の關係にありし故に外ならぬ。

即戰爭、獨逸皇帝に對する貸金、外國使臣の大藏省宛に振出せる手形、政府に對する貸金等は相俟つて英國銀行に對する正貨要求の殺到を馴致し、其結果千七百九十七年二月二十六日同行の正貨支拂停止宣言以來 (Note on the suspension of Cash Payments at the Bank of England in 1797) (A Select Collection of Scarce and Valuable

Tracts, etc., on paper Currency and Bankings, pp. 9596)。同國に於ける銀行券増加は日を追つて旺となり千七百九十六年に至る數年間は千百萬磅以上に昇ること極めて稀れなりしに、千八百九年には千九百萬一千八百九十磅に達し (Report, from the Select Committee of the House of Commons, on the High Price of Gold Bullion) (Ibid. pp. 456-457)。従つて金一匁の造幣公債は三磅十七志半片なるに、千八百八年末の其市價は一匁四磅九志より四磅十二志の間を往來するの状態を呈出してゐたのである。(Ibid. p. 405)。

吾人は先づ彼の需要側に寓目するに至れることの例證より、彼の貨幣數量説に入つて行く。彼は云ふ「貨幣價值は全然其絶對量に依頼するものに非ず、履行す可き支拂に對する其相對的の量に憑依するものである。同一の結果は貨

幣用途を十分の一増加すると、或は其量を十分の一減少する事の孰れよりも生起するであらう。蓋し此孰れの場合に於ても其價值は十分の一騰貴するの故を以て、ある」云 (Ricardo's Works, Mc Culloch ed. p. 398)。此一句は雄辯に彼の需要側を注目するに至れる事實を物語つてゐる。

次いで彼は叙べる。貨幣價值及び支拂量額同一なる時は、必要貨幣量は經濟上貨幣使用の程度に依頼する。若し支拂が單に一口座より他口座に轉記する事に依りて果され、日々巨額が銀行券又は鑄貨を受授する事無く履行せらるゝに非れば、更に顯著なる許多の貨幣は需要せられ、或は同一の貨幣が増大せる價值を以つて流通すべきは明白である」云 (Ibid. p. 399)。斯く Ricardo は信用は貨幣の需要に影響を及し、斯くて以つて貨幣價值を變動せしむと信憑したのである。信用を以つて需要に影響すとすことの可

否は卒爾として論斷せらる可きで無く、幾多の議論の餘地があらう。然し可否の問題は本稿の論及す可き範圍外である。

前述せる如く Ricardo は紙幣に關して貨幣數量説に論及する所が多い。彼は先づ鑄造料の問題より論を起し、斯くて紙幣の問題に移つて行く。以爲らく「國家が貨幣を鑄造し而も何等の鑄造料を徴せざる時は、貨幣は品位量目を同する同金屬の他の如何なる個片とも價值同一であらう。然るに若し國家が鑄造に對し鑄造料を徴すれば鑄貨は一般に賦課せられたる鑄造料丈け未鑄金屬片の價值を超過するであらう。蓋し之を得んとせば、より大なる勞働量即ちより大なる勞働量の生産物の價值を要するが故である。然るに「國家獨り鑄造を行ふ限り鑄造料賦課に際限は無い。蓋し鑄貨の數量を制限することに依り、其想像し得べき如何なる價值迄も之

を引上ぐる事を得るが故である。」(Ibid. p. 213)。

Depreciation of Bank Notes に於ても發見せられる。以爲らく「若し一國に金鑛發見せらるれば、

「紙幣流通も亦此理法に基く。紙幣に對する全徵課は之を鑄造料と看做す事が出来る。紙幣は何等の内在價值を有せざるも、其數量を制限する事に依り、其交換價值は同稱呼の鑄貨又は其鑄貨の中に含まるゝ地金と等しい。品質低下せる貨幣も亦同一原則に基き即ち其數量の制限により其の現に含有する金屬量の價值に於て通用する事なく、其法定の品位量目を具有する場合に有する價值を以て流通するであらう。不列顛鑄造の歴史に於て鑄貨は其貶質に比例して價值の下落したる事は無い。之れ内在價值の低下に隨伴して其數量を増加せざりし故である。」(Ibid. pp. 213-214)。

以上は Principles of Political Economy and Taxation の中に叙述せられたる所なるが、同一見解は又 The High Price of Bullion, a Proof of the

其國の通貨は流通場裡に到來する貴金屬増量の結果價值下落するであらう。一若し一國に金鑛發見に代り、英蘭銀行の如き流通要具として銀行券發行の權限を有する銀行設置され而も商人に對する貸出、政府に對する貸付の方法に依り、多額の發行行はれて通貨數量を激増せば鑛山の場合同一の結果を生起するであらう。即ち通貨の價值は下落し物價は之に準じて騰貴する」(Ibid. p. 264)と更に論歩を進めて曰く「英蘭銀行にて隨時正貨と兌換を行ふ限り縱令其量を増加するも全く一時的影響を貨幣價值に及すに過ぎぬ。蓋し殆ど同額の鑄貨が流通外に驅逐され輸出せらるゝが故である。反之英蘭銀行にて正貨との兌換を停止する時、鑄貨流出後に於ける銀行券の過剰は、其超過量丈り流通要具の價值

る其數量である。即ち貯藏せられたる貨幣、少く共將來の不慮の事件の準備として貯へられたる貨幣以外の彼の所有に繋る貨幣總額である。更に約言すれば貨幣の供給とは一定時に於て流通しつつある貨幣總量である。次に貨幣の需要とは販賣の爲に呈出せられたる總ての貨物より成立する」(Ibid. p. 490)「若し流通場裡の貨幣量を倍加せば、物價は二倍となり、單に四分の一多くの貨幣を増加すれば物價は四分の一丈け騰貴するであらう。——又貨幣増加に代り貨物減少せば同一結果が物價の上に生起するであらう。

——故に、貨幣價値は他の事情同一なる限り其數量に反比例して變動するものである」。(Ibid. p. 493)と。斯く需要供給の法則と貨幣數量説とは密接なる關係に立つものなるが這個の消息は爾後幾多の斯説唱道者の上に窺知せらるゝ。例へば彼の見解は Marshall (O. 10. 124 in Appendix

第一に彼は「他事情同一ならざる」所以として流通速度並びに信用を擧げる。以爲らく、「貨幣の數量及び取引回数同一なれば貨幣價値と貨幣數量に所謂流通速度を乗じたるものに反比例する」(Ibid. p. 404)吾人は爰に明かに貨幣數量説上に於て流通速度なる概念に逢着せりと雖、此は必しも M^{III}に始るものに非ず、既に Henry Thornton が「支拂額同一なれば流通速度の遅緩となるに従ひより多量を必要とする」(A Select Collection of Scarce and Valuable Tracts, etc., p. 170)と論述してゐる。唯前者は此を以つて供給に影響すとなし後者は需要に影響すとなすの差異あるのみである。而して彼此孰れを是認す可や。J. F. Johnson の所説に聽けば、曰く「貨幣流通速度は一般に貨幣供給に影響する要素なりと稱せられる。例へば、Walker 氏は貨幣供給は「二要素即ち貨幣數量と流通速度より成

to the Final Report of the Royal Commission etc.) の賛同する所となり、Walker は「貨幣の價値は他の有ゆる貨幣の價値と等しく需要供給の問題である。——貨幣の需要は交換を行ふに當り、貨幣使用に對する機會である。貨幣の需要は爲さる可き貨幣の仕事の量及び無數の事情により異なる。貨幣の供給は一定の社會、一定の時に要求せらるゝ貨幣の仕事を行ふに使用せらるゝ貨幣の力である——此は二要素即ち貨幣數量と其流通速度より成立してゐる」(Political Economy, pp. 128-131)と論じ又 Johnson も「貨幣價値は貨幣の需要及び供給に憑依する。貨幣價値を説明する爲には、新たなる價値の法則或は學説を創造するの必要は無い」と述べてゐる。(Money and Currency)。

却説前述の如く大體論を試みたる後 M^{III}は之に對し幾多の制限を呈出し來る。立すと叙述し、M^{III}氏は次の如く同一見解を講述してゐる。曰く「貨幣價値は所謂流通速度を乗じたる貨幣數量に反比例する」と。斯問題に對する此態度は後學をして貨幣供給は他貨物供給と相異なるやの感を抱しめ斯くて混亂に陥らしむるの恐れがある。貨幣能力に於ける汎ゆる増加は其信用及び流通速度の何れの結果たるを問はず一定の貨幣供給の行ふ取引數量を増加し以つて貨幣供給其自體の増加と等しく且物價に同一影響を及す如くに観える。然れ共、物價變動は其供給の結果に非ず、貨幣に對する必要減退の結果である。」と(Money and Currency pp. 67-68)現に獨塊に於て斯項目を以つて需要に影響すとなす論者が多い。例へば Roscher, Schäffle, Hippovich 等の名を擧げる事が出來やう。更に M^{III}は流通速度を信用にも適用してゐる。以爲らく「銀行券は爲替手形よりも、手形は

帳簿信用よりも物價昇騰に對し一層有力なる要
具なる事明白である」(ch. XII p. 531)蓋し「貨
幣は其數量のみならず、所有者を變ずる回數を
乗せる數量に比例し物價に影響する如く信用に
於ても亦同一である。次より次へ轉々する信用
は一回の購買を行ふに過ぎざる信用より、其比
例に於て有力である」(Ibid. p. 532)云

斯く流通速度の無視を以つて物價平準の流通
場裡に於ける貨幣數量に依頼すてふ命題に對す
る前提となせる彼は更に信用の發生は右命題の
如き簡單なる表明を許さざるに至るを論述して
ゐる。「信用發達せる商業状態にありては何れの
時か物價平準も貨幣數量より信用の狀況に繁依
するものである。蓋し信用は生産力に非るも購
買力なるが爲めである」(ch. XI p. 514)。爰に
云ふ彼の信用とは爲替手形、約束手形、銀行券
小切手を指示するものにして(Ibid. pp. 515-522)

費に一致する。―此事は裝飾或は贅澤の爲めの
貨物として考へられたる金銀に關しても亦真理
である。然るに貨幣に就いては眞理では無い。
―貴金屬の生産費に於ける變化は貨幣數量の増
減に比例してのみ貨幣價值に作用するものであ
る」(ch. IX. p. 504)云

斯く貨幣數量説唱道者の自ら論及し來れる信
用並びに流通速度は、今や斯説の眞價を動搖せ
しむる禍根となつた。反對論者は斯説を難詰し
て云ふ。「物價變動の原因は貨幣數量のみに歸せ
しむる事能はずとせば、特に貨幣數量のみを重
視し、其變動の唯一の原因たるかの如く論述す
るは不適當ならずや」と。此見地を執る論者は獨
塊に最も多い。従つて斯る反對説により、肉迫
せられたる斯説唱道者は貨幣數量を特に重視す
るの敢て不當ならざるの論據を明示す可き必要
に迫られたのである。今彼等の反對説に對する

「貨幣より獨立し然も明に購買力たる信用は其
最簡單なる形式の信用即ち一人より他人に貸與
せられたる貨幣の信用に非ること勿論である」
(Ibid. p. 514)且又「此作用の原因は信用其自體に
して信用の附與せられたる形態又は法式では無
い」(Ibid. p. 525)。斯くて彼は云ふ、若しも或
貨物の價格騰貴を豫想し、總ての手許所有高を
投資するのみならず、輸入者若しくは生産者が
彼の資源より掛借りする時、彼は現に所有する貨
幣に彼等の購買を制限せるより、より多く物價
に影響を及すことを認めねばならぬ」(Ibid. p.
525)云

斯く彼は信用及び流通速度を以て其大體論を
修正せるのみならず生産費に關しても制限を設
定してゐる。以爲らく、他貨物の價值は條件とし
て供給が現に變化する事を要求する事無く生産
態度を観察し之を綜合する時は凡そ次の三見解
に歸せしむる事が出来る。第一、貨幣と信用と
は恒に一定比率を保持すとすこと、第二、貨幣
供給を流通速度を乗じたる貨幣數量となすか、
或は流通速度の殆ど一定して、實際上物價を變
動せしむる事甚だ微弱なりとすること、第三、物
々交換は理論上に於ては物價に影響すること明
白なるも、而も實際上に於ては殆ど無視し得と
なすこと是れである。吾人は今一二の論者を檢
討し、其一斑の窺知に務めやう。

五 J. Shield Nicholson

十九世紀中葉以後本位論争熾烈を極むる時復
本位論者の鬪將たりし彼は必然の歸結として貨
幣數量説の熱心なる主張者であつた。

彼は先づ假設市場より出發して次第に實際に
接近して行く。

「一、如何なる取引も取引毎に現に貨幣の授受

なくして行はれず例へば一の商人は二本の煙管を所有して煙草を所有せず、他の商人は數分の煙草を所持するも煙管を所持せぬ時、一本の煙管が貨幣を使用する事なく一分の煙草と交換せらるゝを許容しない。即ち信用及び物々交換が全然知られぬとする。二、貨幣は交換を行はしむる以外何等の用途無しとする。従つて貯藏の爲に留置せられず更に換言せば恒に流通しつつある。三、貨物を一個宛所有して貨幣を所持せぬ十人の商人と、總べて百個の貨幣を所有するも貨物を所持せぬ商人あり、而も此貨幣所有者は汎ゆる貨物に對し同一評價をなすものと假定する。』(Money and Monetary Problems p. 57)。斯くて設定せられたる規則に従ひ市場開かるれば總ての貨幣は總ての貨物に對して呈出せられ、有ゆる個々の貨物が同一の價值なりと假定すれば各貨物に與へられたる個片は十個なる可く、從

つて一般物價平準は十であらう。此場合貨幣の各個片は唯一回のみ所有者を變更せること、即ち貨幣所有者より各貨物所有者に移動したる事を注意せねばならぬ。——斯かる嚴重なる前提の下に於ては貨幣價值は正確に其流通量に逆比例して變動す可きは明瞭である。』(Ibid. pp. 57-58)。然るに「物價の上」に於ける結果は、取引を行ふに當り一個の貨幣を十回使用せる時は十個の貨幣を一回使用せる時とは同一であり、(Ibid. p. 64)尚且「取引の數即ち商業の數量に關し、吾人の假設市場は、取引の増加即ち貨幣に由り爲さる可き仕事の増加は、取引一定せる時の貨幣數量の減少と同一結果を招來するを明示してゐる。』(Ibid. p. 65)。而已ならず「物々交換が賣買に代る毎に、貨幣の需要は減少し、其價值は下落す可きを認知せねばならぬ (Walker, Money, p. 64)』(Ibid. p. 66)。と論述したる後信用に關

して力説して曰く「一見すれば發行を制限する政府の意思に依る外不換紙幣に基因する物價昇騰に制限無きが如く、鑄貨に代る信用の創造も亦銀行及び商人の意思に依る外之に對する抑制の存せざるが如く思料せられる。故に語を強めて信用てふ膨大なる上部建築は金屬の土臺に立脚せねばならず、従つて此土臺にして撤去せらるゝ時は全建築は崩壊し去る可きを力説する必要がある。』(Ibid. p. 74)更に又「一般に英蘭、愛蘭、蘇格蘭に於て一磅以下の金額に對し、賃銀は硬質を以つて支拂れ小賣業の大部分は同一の方法に依りてのみ行はれる。——従つて若し、信用の擴張に依り卸賣値段騰貴するも直ちに労働者に支拂ふ可き金額の増加及び小賣業に於ける需要増加の爲めに掣肘せらるゝであらう。』(Ibid. pp. 83-84)。斯くの如く信用を解説する事に依り、彼は斯説の依然支持せらる可きを主

張する。此見地は其五章に入れば一層明白に表明されてゐる。彼は英國の卸賣取引の九割は或る形式の信用に依り決濟せらるゝの事實を指摘し、Millの所説を以てすれば斯る状態の下に在りては、其眞理たるの地位を喪失せざる可からざるを論じ、果して然らば斯説は其地位を保持する爲めに其論據を那邊に覓む可きやを自問する。彼は其解法の一として吾人の Taussig (The Silver situation in the United States p. 73-75) に於て認むる如く「貨幣の定義を擴張して交換要具として貨幣の職能を果す有ゆる形式の信用を包含す」可きを論じ(Ibid. p. 144)然も此に同意せずして曰く「信用自體は金屬の基礎の上に立ち、此基礎は信用擴張に依る物價騰貴に掣肘を加ふるものであり。』(Ibid. p. 146)且又「甚だ發達せる商業國以外に信用不振の國の存在するを牢記せねばならぬ。斯かる國に於ては金屬の尠少は

直接に最朴樸なる形式の貨幣數量説に指示せられたる方法に従ひ物價に影響する」と。(Ibid. p. 147)。

次いで彼は金屬の生産費と貨幣價值の問題に論及する。以爲らく「金の生産費は年々の供給額を増減し、斯くて其使用量を變ずることに依りてのみ一般物質上に影響する」(Ibid. pp. 69-70)。「金の耐久性大にして而も年産出の大部分が技藝の爲に需められ、斯くて金貨を現に流通しつゝある量額に限定せんとする事を牢記せば、現在の状態に於て年産額變動の影響は甚だ微々たるを知る事が出来よう。此點は J. S. Mill の如き明晰なる思想家をも斯要素の結果を過大視するの誤謬に導きたれば、最も力説す可きである。

確に金の生産費は物價昇騰或は金の價值下落を掣肘する意味に於てのみ其價值を動かす最大原因である。然し金の數量は物價を支配する唯

一の要素にして、生産費は此數量を支配する唯一の要素なるを觀て Mill の如く「金の價值は一時的變動を別として其生産費に憑依す」と論斷するは大なる誤謬である。——斯かる誤謬の生起せる過程を見出すは容易である。平均すれば、金貨の價值は同一重量の金地金の價值と均等なる可きは極めて正常なる觀察である。然れ共論辯に於ける次の階段は因果關係を顛倒せる謬見である。蓋し Mill は吾人にして單に金地金の價值を決定したりとせば、其により造られたる貨幣の價值をも同一方法に依り決定せらる可きなりと想像したのである。Mill は單純に金地金は一の貨物なり隨つて其標準價值は生産費に依頼すと論述してゐる。茲にこそ謬見の存するなれ。正當に解釋すれば一般物價平準は幾多の原因に憑依し斯くて一般物價平準が金貨の交換價值を決定し同時に此金貨の價值が金地金の價

値を決定するものである。(Ibid. pp. 70-71)。」と

前述の如く彼は信用に關しては、彼の見解を明確に表言せりと雖物々交換並びに流通速度に關しては唯其影響の可能性を認諾せるのみにして寸言も其項目に對する態度を記述してゐない蓋し此は斯項目を等閑視して可なる事を間接に表示したものであるまい乎。此點に關し Johnson は明瞭に表言してゐる。「流通速度は信用の如く大なる變動を惹起せざれば重大では無し。如何なる社會に在りても其は殆んど一定してゐる。一弗が其所有者を變ずる回数は明白に人々にどり幾許の貨幣を將來に於ける用途の爲に貯藏するを便宜とするやの事情に依頼する。此事情は社會を異にせば同一ならざるも然も同一社會に於ては日々又は季節毎に變動するものである」(Money and Currency. p. 66)。

信用及び流通速度は反對説との論争點を形成

せる事以上縷述せるが如しと雖、然も更に猶重大なる論争點の發生しつゝあるを認知する。即ち此等諸要素並びに貨幣數量、商業の數量、物價平準の間に於ける因果關係である。就中物價を以て受動的となす事に對し幾多の反對論がある。Scott, Laughlin, Anderson の如き其一例にして洵に各要素間關係の考究は此の一點の解決を目的とするに外ならない。(Barker. The Theory of Money p. 83)

六 Irving Fisher

吾人は Irving Fisher の Purchasing Power of Money に於て、近代經濟學著書中に逢着する貨幣數量説中に於る、最も強硬嚴烈なる陳述を見出し。又吾人の味讀せる諸書の何れよりも最も首尾貫徹せる論法を使用せる一卷を取得する。

此一卷は如何なる單行書よりも精巧細緻に學

説を記述し、他論者の貨幣數量説辯護の爲に當然論及せられたる理論を集成してゐる。更に Fisher 教授の著書は一般論者より多大なる信憑を受け、以つて貨幣數量説の公定的陳述を以て遇せらるゝに至つた。Sir David Barbour は學説辯明に當り憑依す可き權威として Fisher 教授を挙げ A. C. Whitaker 教授は彼の立脚する一般貨幣論の全體系を無制限に踏襲す可きを公言し、J. H. Hollander 教授は貨幣及び物價に關する Fisher 教授の著作を以つて真正なる科學を建設す可き學理と歸納的驗徴の結合の典型なりと賞讃してゐる。(Anderson, The Value of Money. p. 154)。

彼は其見解を代數的表現に依り闡明してゐる。此企圖は既に Simon Newcomb (Principles of Political Economy, 1885) Edgeworth (Report on Monetary Standard, Report of the British

る。二、M 及び T 依然たる時に V のみ變動すれば、方程式の貨幣邊は同一率を以つて變動を招來し、従つて貨物邊も亦同一比率にて變動する。其結果汎ゆる P が其比率にて變動するか、又は或る P は夫より多く他の P はより少く變動し互に補整し斯くて同一平衡を維持する。三 M 及び V が變動せざる時は貨幣邊も貨物邊を變動しないのであらう。其結果汎ゆる P が變動するに從ひ汎ゆる P's が反比例して變動するか或は一はより多く、他はより少く變動し互に相補整するであらう」(Ibid. pp. 26-27)。

以上の論述より當然提起せらる可きは如何なる意味に於て砂糖若干と貨幣若干とを等しとするやの疑問である。斯點に關し彼は右方程式を價值の方程式となす事明瞭である。以爲らく「一ケ年中に於ける全取引に於て支拂はれたる貨幣總量は其價值に於て購入したる貨物總體の價值

Association for the Advancement of science, 1887) Hadley (Economics, 1896) 等に依り試みられし所、更に又 Barbour, Kemmerer の採用する所である。彼は貨幣數量を M 其流通速度を V 一定社會一定期に於ける各貨物の平均價格を P P' 等とし其購買せられたる總量を Q, Q', Q'' 等とし期くて $MV = PQ + P'Q' + P''Q'' + \text{etc}$ なる方程式を形成し、次に之を簡單にして $MV = \sum PQ$ として更に P's を T にて表明し、以て $MV = PT$ となしてゐる。(Purchasing Power of Money pp. 25-26) 斯くて彼は此方程式より次の三點を演繹する。「一 V 及び T 依然たる時に M のみ變動すれば、方程式の貨幣邊は同一率を以つて變動を招來し、従つて貨物邊も亦同一比率にて變動する。其結果汎ゆる P が其比率を以つて變動するか、或は一の P は夫よりも多く他の P はより少く變動し互に補整し斯くて同一平衡を維持す

に等しい」(Ibid. p. 17)。二 第二に提起せらるゝは、流通速度及び貨物總量の測定方法に關する問題である。彼は此點に答へて言ふ「貨幣の全流通量即一定時一定社會に於ける貨物に對し支拂れたる貨幣總量を E にて表示し、該期間に於ける通貨平均總量を M にて表示する時—— E M は貨幣流通速度である」と。(Ibid. p. 24) 又「汎ゆる貨物を計算する單位として其賣却に際し、普通使用せらるゝ單位にあらずして基礎年度なる特定年度に於ける一弗の價值を形成するに足る量を使用する時は條理的となるであらう」(Ibid. p. 196)。

這般の敘述は信用を除外せるを以つて、信用發達せる現實社會に適用する時は斯要素をも考究せざる可らず。爰に於て乎彼は M を以つて預金通貨を表示せしめ V を以つて其流通速度を表

II Pt.)と修正してゐる。斯く方程式を擴張して預金通貨をも包含するに至る時、貨幣數量の物價に及す影響は幾分間接となり。其影響を探及する過程は愈々複雑となり且困難を加へる。之を以つて普通信用の出現は貨幣數量と物價との間に介在する關係を減殺するが如き觀を呈し、茲に反對論者を生起せるが此點に對し彼は辨駁して云ふ、「二個の事實は預金通貨をして貨幣に對し、大小孰れか一定の比率を持続せしむる。其

一は銀行準備金、銀行預金に對し多少に不均一定比率を保有する事である。其の二は各個人商會社團法人は現金取引と小切手取引との間、從つて又彼等の貨幣と預金との間に多少に不拘一定比率を保有する事之れである」と。(Ibid. p. 50.)爰に論ずる彼の信用とは預金の意味に外ならない。何故に彼は爲替手形、帳簿信用を等閑に附したるか。彼は帳簿信用は物價に直接影響

を與へず(Ibid. p. 82. p. 370)。貨幣流通速度を増進する事に依る間接の影響を與ふるものなりとなしたのである。(Ibid. p. 81-82. pp. 370-371)。

以上論述せる彼の貨幣數量説は正常期のみに適宜され、過渡期には嚴格に支持せられないのである。此點に於て吾人は困難なる問題に逢着せざるを得ない。勿論此問題は彼のみに限らるゝ事では無い。例へば Mill は Short run theory であり Taussig は極端なる Long run theory である。即ち正常期と過渡期との正確なる區別如何及び斯學説の制限を認諾す可き程度如何。彼は此點に關し明確なる定義を有せざるも、過渡期とは方程式中の一項に於ける變動發生の時より他の總ての頂の間の關係が調整せらるゝ迄の期間を意味し正常期とは斯かる發生前の期間又は調整以後の期間を意味したと思考される。

次いで彼は此等諸項 間の因果關係に論歩を進める。第一にMの増加は一、Mの比例的増加を招來し「V.V.O'sは影響せずPを騰貴せしむとなしてゐる。(Ibid. pp. 151-159)。而してV.V.O'sの變動せざるは「流通速度は個人の習慣に依頼し」(Ibid. p. 152)「商業の潮流は自然の富源及び技術の状態に憑依す」(Ibid. p. 155)る故である。第二にM'の變動に就いては「M'は正常期に於てMに依頼するが故に、M'増加の結果如何を問ふ必要は無い。此結果はMの結果の内に包含せられる。然しM'のMに對する比は變動す可きを以つて此變動の結果は追究せねばならぬ」。(Ibid. p. 162)「一國に於けるMのMに對する比率増加の唯一の認知し得る結果は其國より貨幣を他國に驅出する事である」。(Ibid. p. 163)。論ずる。第三にV及びV'變動の結果に關しては究極の結果は物價の上に存し、貨幣數量及び商

業數量の上に存し無い。然し國際商業に依り他國と連結せられたる一國に於ける貨幣流通速度の變動は其國に於ける貨幣流通速度の上に反對の變動を惹起するであろう」(Ibid. p. 164)と論じてゐる。第四にO's變動の結果はP'sのみならずV.V.M.M'にも影響を及ぼすとなしてゐる、即ち言ふ「M.M'又はV.V'の結果が右邊を増加すると同時に、O'sの増加量丈け左邊を増加するときはP'sに及す影響は皆無である。もし左邊に及せる結果が右邊に及せる結果を超過するときは物價は騰貴するであらう。もし左邊に及せる結果がO'sの増加量より少ならば物價は下落し而して其はO'sの増加に比例してゐないであらう」。(Ibid. p. 168)。と最後に殘されたる問題は物價水準は果して受動的なりや否やと云ふ事である。彼は此點に關し物價水準昂騰せりと假定して其結果を論究し以つて其反對論を反駁してゐる。物價昇

騰の爲め貨幣物量は増加するものではない。吾人の既に知れる如く物價高き地は貨幣を驅逐するを以つて貨幣は外國より流入する事は無い。——同一理由に依り貨幣は造幣局を通じても流入しない。元來地金と金貨とは貨物に對し同一價値を具有するものなれば、物價を二倍したりとせば、其以後金貨は其購買力を半減するであらう。従つて何人も其價値を半減せんとして態々地金を造幣局に持來る者はあるまい。——最後に物價高き事は鑛山發掘を刺戟する事無く、反つて之を萎縮せしむ可く又金使用を減退する事無く、反つて増進するであらう。(Ibid. pp. 170-171)「物價昂騰が預金通貨を増加すと思惟するは大なる謬見である。——貨幣は預金通貨の基礎である。故に前者の減退は後者の減退を惹起するであらう」(Ibid. p. 171)「夫々の流通速度に就て觀るも不完全である。此は個人の便

宜に適合す可く調製せらるゝものである」(Ibid. p. 171)最後に又「假令勞銀を包含する汎ゆる價格倍加せりとして商業の數量の減退す可き理由は無い。概して人々は高き價格を支拂ふと同時に受取るものなれば、彼等の取得したる高き價格は彼等をして其購買を減少せしむる事なく高き價格を得せしむるであらう」(Ibid. p. 171)又。因果關係に對する Fisher の見解は克く斯説唱道者の態度を察見せしむるものなりと雖必しも其全般を蔽ふものにあらず。例へば Tausig の如きは銀行信用(銀行券、預金)と商業數量とは相互に繫依すと思料してゐる。(Principles of Economics. p. 433. pp. 438-439)。

斯く諸要素間關係を考究し來る時、斯説と前述せる反對説とは全然背馳するが如きも然も交睫熟思する時、其間に一抹の相通する所あるやに感得せらる。故に Barker の以つて最も有力

なる反對説となす生産費説と斯説との連結調和を企及する論者あるも必しも無稽の企畫と斷じ去る事を得ない。

以上縷述せる反對論の外今次歐洲大戰に際し悠忽として顯出せる Robert Liefmann の計算單位學説は其心理的立脚地より斯説を如何に理解するも三個の誤謬を免れずと批判し、一、貨幣と財とを對立せしめたること、二、物財價値に對し一の客觀的表現を見出すを可能なりと思惟すること、三、交換せらるゝ所の財と貨幣とを等價物なりと思考すること、を論難せるを觀るも、此は現在の全經濟學に對つて放たれし難詰にして單に斯説のみの蒙る可き攻撃では無い。(完)。

ソレル著作年表

百瀬 二郎

次に掲ぐる年表はギイグラン(佛)、マタハンマ(奥)、ベツコリニ、ランセイロ(伊)、リゾイン(米)等に依り、傍らソレル自身の著書を参照して、編纂したり。年號の重ね(記されたるは、版の重ねるを順次に示す)。

(一) 單行本

1. Le Procès de Socrate. Paris, 1889.
2. Morale sociale (conference). Paris, 1899.
3. L'evoluzione del socialismo in Francia. Torino, 1899.
4. Questions de Morale (conference). Paris, 1900.
5. L'avenir socialiste des syndicats. Paris, 1900, 1901.
6. Ruine du monde antique "Conception matérialiste de l'histoire." Paris, 1901, 1902.
7. Essai sur l'Eglise et l'Etat. Paris, 1901.
8. Introduction à l'économie moderne. Paris,